

地域創造・暮らし安心部会

第1回	平成27年8月 6日(木) ……………	47
	@おぐに開発総合センター 集会室	
第2回	平成27年8月25日(火) ……………	52
	@おぐに開発総合センター 保健相談室	
第3回	平成27年9月14日(月) ……………	59
	@小国町役場 庁議室	

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第1回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- **日時** 平成27年8月6日(木) 18:30~20:30
- **会場** おぐに開発総合センター 2階 集会室
- **出席者** 懇話会委員：安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤町民税務課長、伊藤訪看ステーション所長、菅野建設技術主幹
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、廣瀬主任、渡部主任
- **概要** 事務局から総合戦略の概要と懇話会の主旨の説明、座長の法政大学 関司先生の紹介、各委員から自己紹介をした後、事務局の進行で話し合いを進めた。

○話し合い要旨 (内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。)

佐藤室長より、関司先生から提示された話し合いの進め方の概要について説明し、次の項目について各委員から発言いただいた。各委員からの発言は別紙のとおり。

<話し合いの項目>

- ①皆さんの家族構成を書き出してください。また、それぞれに10歳加えてください。
- ②①を見ながら、10年後の自分、家族の有り様について、印象を整理してみてください。
- ③お住まいの集落、地域、また町全体がどうなっているのか、どうなってほしいか、感想をお願いします。
- ④よりよい10年後を目指して、この部会で何を話し合っていくのがよいでしょうか？キーワードまたはキャッチフレーズを書き出してみてください。
- ⑤本日の感想、次回への抱負

※時間の都合で、今回は③までを話し合い、④以降について次回まで考えてきてもらうこととした。

○その他 第2回部会を8月25日、第3回部会を9月15日で調整することとした。

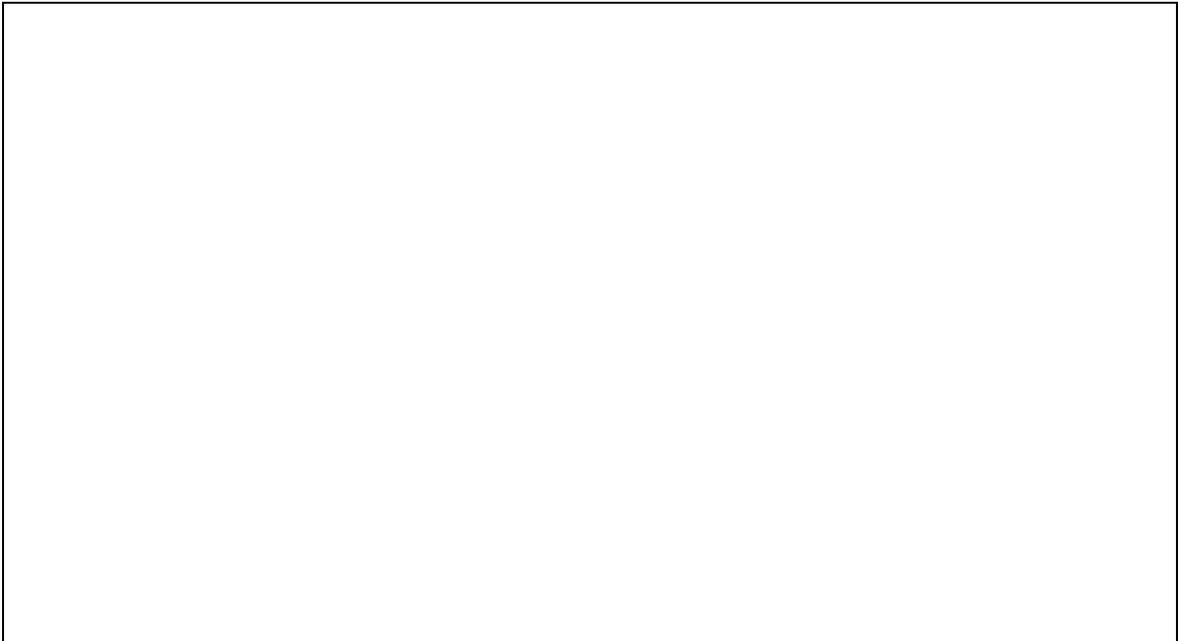
なお、後日関司先生と協議し、第2回部会を8月25日に、第3回部会を9月14日に開催することとした。

「10年後のあなたの家族、地域はどうなっているか？どうなってほしいか？」

①皆さんの家族構成(年齢)を書き出してください。また、それぞれに10歳加えてください。



②①を見ながら、10年後の自分、家族の有り様について、印象を整理してみてください。



(裏面に続く)

③お住まいの集落、地域、また町全体がどうなっているのか、どうなってほしいか、感想をお願いします。



④よりよい10年後を目指して、この部会で何を話し合っていくのが、よいでしょうか？
キーワードまたはキャッチフレーズを書き出してみてください。



⑤本日の感想、次回への抱負



<p>④ よりよい10年後を指して、この部会で何を話し合っていくのがよいのでしょうか？キーワードまたはキャッチフレーズを書き出してください。</p>			<p>もともと安心な小国町だと感じています。ただ社会変化や多くの情報によって今の私たちがその良さ、安心な部分を見ずして気づかないでいるのかもしれない。自然や風土、老人も安心な車の多い小国町、新たな何かとより元々の良さを「再確認」して後世に伝えられるような話し合いをしていきたいと思えます。 ①結婚・子育て・出産 ②生活・仕事 ③若後・地域の連携 キャッチフレーズは？ 総合戦「略」 たたかいを略すること</p>	<p>無理をしない。</p>	
<p>⑤ 本日の感想、次回への抱負</p>			<p>様々な方々のご意見をうかがえて勉強になった。</p>	<p>現状ベースで話をする。</p>	

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第2回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- **日時** 平成27年8月25日（火） 18:30～20:30
- **会場** 小国開発総合センター 3階 保健相談室
- **出席者** 懇話会委員：関司直也、安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤和人、伊藤優子
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、
廣瀬主任
- **概要** ・佐藤室長より
 - ・総合戦略における基本方針と基本的な方向
 - ・総合戦略・過疎地域自立促進計画 各施策等の整理
 - ・小国町地域創生総合戦略住民意識アンケートの実施状況について、概要の説明を行った後、関司委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

関司委員

第1回会議は、所用により欠席したため、佐藤室長に会議を進めていただいた。懇話会という何を話したらいいか分からないというところもあるので、自分のことから話しをしていただき、それから家の話し、そして小国町の話しと広げてもらった。かなりいろいろな話しを出してもらったと伺っているが、あらためて、自己紹介も兼ねて第1回会議のを振り返って各委員から感想等について発表していただきたい。

安部委員

コバレントを早期退職して今は農業をやっている。会社は定年になれば終わりだが、農業は体が続けばずっとやれる。給料をもらうことだけが仕事ではない。いま個人でやっていることを法人化することも考えている。

それから、守る努力と変える勇気が大事だと思っている。変わらないということはそのことについてみんなが努力しているということだと思う。自然についてもそうだが、変えちゃいけないところはやっぱり変えないでずっと残していくべきだが、昔とずっと同じでいいかといったらそうではない。必要な場合には新しい方向にすすんでいくべき何だろうなと思っている。

金野委員

もともと小国町の人間ではなく、緑のふるさと協力隊を経て小国町に住むようになり、現在は町外に住んでいるが、仕事については小国町のNPO法人につとめている。NPOでは小国町は森林が多いのでそれらの町にある資源を利用して交流人口を増やせないかということで小国町から仕事もらってやっている。

この会議で意見を言えばなしでいいのか、それに対する解決策なども出さないといけ
ないのか、どうなんだろうと思っている。

→事務局

皆様から出されたご意見に対して、行政がどのように具体的な対策をしていったらいいか
ということについてご意見をいただけたらありがたい。

佐藤委員

現在は農業をやっている。町にも色々お願いして補助事業などをやっているが、お金があ
るうちは続けられるが、打ち切られると続けるのが難しくなってくる。農業なんかはそれが
てきめんでそれに振り回されているところあるので、長期のスパンで計画を立ててもら
うと助かるし、計画を立てても実行になかなか移せないというのが今の実感である。

舟山委員

高齢者施設で働いており、夫は現役のマタギ。現在のマタギは54才の夫が中堅であり、
熊を捕ってきても運んで来るのが大変。また、鉄砲を持つにもお金がかかるし、放射能の影
響もあるので、このままでいけばマタギ文化はどうになってしまうのかという心配がある。

また、高齢者施設で働いていることもあり、小国町の高齢者に対する心配もある。

関司委員

この部会では、皆さんが生活で感じている不安、不満をあぶりだしていくことが期待され
ていると思われるので、どんどんそういった意見を出してもらって、できれば次回の会議で
不安や不満に対する施し、手当、その優先順位、実行ベースに乗せる話し等をしたいと思っ
ている。

今回の会議の議論については、まず主体を（高齢者、現役層、子育て層、若年層）とし、
それぞれの主体が感じていると思われる暮らしの中での不安や課題について皆さんに出して
もらいたい。

安部委員

北部の70～80代の人ほどなんかがあってもいまのところで死にたいと思っていると
思う。苦勞してきているので、暮らしのなかでもそれほど不安を感じていないのではないか。

40～50代の人になるとまた話が違ってくると思う。土地、家、親があるのでここに
いるが、親が居なくなれば離れることもあるのではないか。

若年層になればまた違ってくる。地域行事への参加状況については参加しているというよ
り義務で参加しなければいけないというような感じだと思う。ただ、最近開催された北部地
区の盆踊りでは予想以上に若い人達も協力してくれた。

現在使用していない北部小学校に子ども達を学校に1週間滞在させて、親やじいちゃんば
あちゃん達はこんなことをやっていたというのを教えるのも、地域への愛着を促す意味で一
つのやり方かもしれない。

金野委員

以前住んでいた白沼地区の小中学校は統合されたが、学校があったときは歩いたり自転車で登校する生徒と地域の人との会話があったが、現在はスクールバスなので子どもの姿が見えなくなったのは寂しい。

教育委員会でやっているサマーキャンプ等の企画の委員をやっているが、町中心部の子ども達の参加が多く、周辺部の子ども達はあんまり参加してこない。それはキャンプに参加しなくても自分の住んでいるところにそういう環境があるということだと思うが、町中心部の子どもはやっぱりこういうイベントに参加しないと川遊び等自然とふれ合う機会が無いのかなと思う。

佐藤委員

20代中盤より若い若年層の定住が少ないのが不安要素かなと思う。また、同年代との出会いが少ないこと等への不安あるのではないかな。

20代中盤から40代中盤の世代は子どもを育てる手間と親との関係性、特に乳幼児、就学前の子どもを抱えたお母さんは医療に対する不安があると思う。

40代中盤から60代ぐらいまでの世代は、自分の次の世代の仕事の場、暮らしの場に対する不安、どのように世代交代していくかという不安があるのかなと思う。

65才以上から79才ぐらいの世代は小国の中で一番元気だと思う。なぜなら年金があるし、雪に対しても除雪が整っていない時代を過ごしてきたので、耐性があると思う。

それ以上の世代は、元気な方もいらっしゃるが、老人だけの世帯は災害が起きたりしたときのことを考えて、その地区の中で情報共有などどういった関わり合いを持っていくか考える必要がある。

渡部委員

東部地区は高齢者が6割ぐらい65才以上だと思うが、70才ぐらいまでは元気だがそれ以上の年代にとってはやっぱり雪は大変だと思う。どの家に一人暮らしの高齢者がいるかということ把握している人は結構少ない。行政にそういったデータがあるなら提供してほしい。

自分より上の現役層はほとんど農業に従事しているが、儲からなくても暮らしていけるぐらいは収入がほしいと思っている。

地域に学校は必要だと思っている。地域でいらぬといえ別だが、必要と思われているうちは残してほしい、

若年層については、地元に戻ってきている人達なので気持ちが強い。もっと増えてほしいがあまり帰ってこない。

舟山委員

学校が無くなると親はなかなか集まる機会が無くなる。学校が無くなるまでは、子ども達は地域みんなに育てられたし、大きな子が小さな子の面倒をみたりしながら長い距離を通学していたが、今はそういう光景が見られなくなった。

子育て層については、私の職場ではほとんどの女性が3人の子どもを産んでいる。そういうがんばって子育てをしている人達を見ると何か支援策があったらいいなと思う。保育時間は伸びているのでいいことだとは思いますが。私の時代は子どもが生まれると親が仕事を辞めて孫の面倒を見てくれた家が多かったが、今は自分の親が働いているということが多くて、孫の面倒を見てくれるということがあまりないので、今の子育て世代は大変だと思う。

小国町は一人暮らしの高齢者が多く大変だと思う。周辺部は移動販売車が来てくれるので買い物はそれなりにできると思うが、中心部の方からは買い物が大変だという声を聞く。

私の母も一人暮らしだが、回覧版や広報を届けたりするのも大変だと言っている。

関司委員

今の話を聞くと世代間のつながり、組み合わせで考えるとなかなかうまく回らないというものが結構あるのではないかと。また、見えてないものがたくさんあるのではないかと、たとえばスクールバスや学校が無くなって、子ども達だけで無く親同士や親と子どものつながり方もかわってきているのではないかと。また家族内でもこれまで2世代、3世代でカバーしていた介護や子どもの世話などについてもだいぶ構造が変化してきている。

一方、若い世代も地域行事などに関わってくれるといった前向きな意見もあった。

今の話を踏まえて、各委員から自分はこう思った等の意見を出してもらいたい。

金野委員

高齢者の人でも70代くらいの体が動く人は一人暮らしになっても、除雪をしっかりとやっているという印象。家族がいる家でも除雪はおじいちゃん、おばあちゃんがやっていることが多く、自分と同じくらいの年代の人と雪の話しをしても話しが通じないこととかあって、若い人達でも結構雪いじりをしていないという印象だ。

安部委員

北部地区では、一人暮らしのおばあちゃんの家を除雪なんかは近所の人やってくれたりする。一人でやれるところはするけれども、軒下を除雪などは1週間に1回除雪機でやりしている。そういった付き合いがあるので一人でも動けるうちは暮らしていける。

関司委員

高齢者の一人暮らしの除雪を近所の人やっているとのことだが、比較的若い世代の委員の皆さんはその辺どうか。

渡部委員

東部地区の家もだいたい除雪機をもっていて、除雪作業自体はそれほど労力を使わずにやれるが、若い人達で仕事で除雪に行っているひとも結構いる。忙しいときは自分の家の除雪もできていない場合もあるので、そういった場合は隣近所の除雪まで手が回らないということはある。

高齢者が除雪することで認知症の防止になったり隣近所との情報交換の場になったりすることもある。

佐藤委員

10年ぐらい前は除雪作業が原因でお亡くなりになった高齢者もあったが、近年はシルバー人材センター等で除雪をしてくれる制度があるのでそういった事例はほとんど無いと思う。

大雪が降るところで暮らしていることの連帯感みたいなものもあると思う。

関司委員

除雪に関する不安をフォローし合える体制、たとえば行政から独居老人宅の情報提供があったりとかすれば動きやすいという話もあった。

80以上の方への地域の構えについて、各委員の考えをお聞きしたい。

佐藤委員

民生委員を通じて、見守りが必要な老人宅を地域で把握しておく方法もあると思う。

事務局

健康福祉課で、福祉カルテという高齢者の情報をまとめたものを作成しており、警察などと情報共有を行っている。

福祉カルテは民生委員を通じて作成しているので、民生委員は地域の高齢者世帯については把握していると思われる。

渡部委員

福祉カルテなどの情報もあるが個人情報の関係もあり見せてもらえないところもあるので、地域で高齢者世帯の情報を把握している人はほとんどいないと思う。

舟山委員

民生委員であったとしても、用も無いのに高齢者世帯に行くのは抵抗があるという人もいる。ある自治体ではヤクルトを配りながら見守りに行くというところもあり、用事があれば行きやすい。確かに個人情報の縛りがあるので、民生委員に頼らざるを得ないのではないか。

関司委員

和歌山県では、訪問する用事として広報誌を持って行って、広報誌読みましたか、内容分かりましたかなどと聞きながら様子を伺う取り組みをしている自治体もある。

それから、子育てと親の介護の両立について感じているところがあればお聞きしたい。

舟山委員

私の家はおじいちゃん、おばあちゃんが元気なうちにこどもが成人になったのでよかったが、これが早くおじいちゃん、おばあちゃんが介護状態になっていけば、いちばん子どもにお金がかかる高校、大学のときに介護しなければならぬという経済的負担の問題が出てくるのかなと思う。

金野委員

私達夫婦は長男、長女ではないので今のところ親の介護はしなく体もいいのかなと思っている。

関司委員

先ほど、若い世代が盆踊りに多く参加下という話があったが、年齢はどのぐらいなのか。

安部委員

20代ぐらいだが、予想よりも多く参加してくれて手伝ってくれた。各地区に公民館があり、その地区ごとに役割分担を決めて、あとは公民館長が声かけをした。

金野委員

白沼地区は、30～40代の子育て世代は盆踊りや運動会などの子どもが関わる行事は企画から携わっていて、60～70代の世代はあまり関わっていなかった印象だ。

舟山委員

熊まつりには地元から出ていった子ども達も嫁を連れて手伝いに来てくれたりするので、熊まつりは継続していくべきイベントであると考えている。

子どもには、手伝いに来るもんだぞと言っている。

安部委員

北部地区での盆踊りでは、北部振興協議会の役員単位でやると小さい公民館などは入らず、手伝いに来られないので、公民館とかそういった単位でやっている。

公民館の役員になっている人しか来ないのではないかとも思ったが、名簿に名前の無い人でも来てくれた。高校生も踊ってくれ、踊っている人のほうが見ている人より多かった。

渡部委員

昔は東部地区各地で盆踊りをしていたが今は2地区だけとなった。盆踊りは帰ってきた人が段取りをやる仕組みができていて、70ぐらいの人の参加はあまりない。

佐藤委員

若い人がSNSで情報を広げる力はすごいと思う。ただ若い人は一回つまずいたりしかられたりすると来なくなる。

関司委員

町中心部と周辺部でだいぶ暮らしぶりや雰囲気が変わってきているという話があったが、こちらのエリアで足りない部分を別のエリアでサポートしていくなんていうことも出てくるのかもしれない。

オブザーバーから感想があればいただきたい。

後藤町民税務課長

私は町中心部に住んでいるが、委員の皆さんのところとは環境が違うなあと感じた。消防団に入る若い人も少なく、つながりが薄くなっているので、周辺部のつながりの良さの話を聞いてうらやましいと感じたし、中心部でもそういったつながりを求めていきたいと感じた。

伊藤訪問看護ステーション所長

今日の会議に参加するに当たって、小国町の現状に町民の皆さんはもっと不満や不安を

持っていると思っていたが、地域でのイベントなどの話を聞いていると意外と小国も捨てたもんじゃ無いと感じた。私は高齢者に携わる仕事をしているが、高齢者の一人暮らしの人は確かに不安はあるけど意外と生活できている人が多い。メールを使って身内の方と連絡をとっている人もいる。調べれば本当に心配な高齢者はほんとに一握りだと思われる。

小国で暮らしていきたいと考えている方の側面からサポートしていく体制づくりが大事だと感じた。

関司委員

アンケート結果について、一般単純集計のQ10生活環境の満足度をみると、どちらともいえないと回答した割合が4割から5割という選択肢が結構多くあり、今日の委員の発言からもそれを裏付けるものが結構あった。行政が支えていかなければいけないもの、地域でうまくやれているものの整理が必要と思われる。そういった整理がうまくやれていけばこの割合ももう少しいい方に動くのではないかな。

最後に今回の会議での感想を各員よりいただきたい。

安部委員

自分がどう生きていこうかあまり真剣に考えたことはなかったが、自分の生まれ町だし、これからの人生についてどう楽しく過ごしていくにはどうしたらいいかももう少しよく考えていこうと感じた。

金野委員

私自身は町外に住んでいて、分からないところたくさんあるが、今まで見てきたことで話せることもあると思うので、またよろしく願いいたします。

佐藤委員

東京は出生率、待機児童の数字は悪いのに若者が多いのは働く場の問題だと思う。小国町のいいところを青年層や若年層にその価値を再認識してもらいたい。新しいものを作るより、手薄なところを補強していくことに重点を置いていくのがいいのでは無いかと感じた。

渡部委員

参加していろいろな情報が得られて良かった。

若い人は打たれ弱いかもしれないが適応力はあると思うのでそんなに心配はしていない。

舟山委員

何かをやろうという若い人もいるし、南部地区を始め周辺部はまとまりあっていいなと再認識した。逆に中心部のほうが心配だと感じた。

- **その他** 次回会議については9月14日（月）に行うこととし、第4回会議については10月1～7日で調整することとした。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第3回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- **日時** 平成27年9月14日（月） 18:30～20:30
- **会場** 小国町役場 3階 庁議室
- **出席者** 懇話会委員：図司直也、安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤和人町民税務課長、伊藤優子訪問看護ステーション所長、
菅野享一建設技術主幹
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、廣瀬主任、渡部主任
- **配布資料** 小国町地域創生総合戦略策定のための住民等意識調査の結果について
- **概要** 佐藤室長からアンケート結果の概要について説明した後、図司委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

図司委員

前回の議論を私なりにまとめると、地域創造の面ではマタギ文化や盆踊り等の地域行事の話、暮らし安心の面では除雪や高齢者の買物・見守り、子育てに関するサポート体制などの話があったと思う。これらに共通する課題として、若い世代へのバトンタッチやそれぞれの世代が集まる場などがあげられた。今日はこれらの課題に対してどういう手当てができれば良いか、また地域や家庭が何をどうすれば良いかについて考えを聞きたい。

アンケート結果の印象なども含めて、まずは一巡話しを伺いたい。

金野委員

町に対する愛着の部分は、大体このくらいだと思う。以前に小国中学校で話したとき、中学生の半数は町内に残りたいと考えていた。「一度出て帰ってきたい」と考えている生徒が一番多かった。私は、自分の町しか知らないというのは不安があると思うので、「一旦は外に出たほうが良い」という話しをした。

舟山委員

9ページQ10の医療・保険・福祉の満足度は、町内で出産できないことや、子供の急な病気に対応できないというのが大きいと思う。自分も冬の出産だったので不安があった。鉄道・バスの満足度については、町外の高校に通うとき米坂線の本数が少なく大変なのだと思う。

佐藤委員

アンケート結果は全部連鎖していると思う。今後の居留意向を見ると、40代で住み続けた人が4割。地域づくりへの参加意向も「頼まれば参加したい」が大変多い。親がそういう考えなので、中高生もそのようになると思う。若者の定住のキーパーソンはその親。次の世代が自然な形で町に残るようにするためには、親の世代がしっかり自分の子に情報発信する必要があると思う。

安部委員

中高生の意向が一番知りたかった。自分が中高生の頃は、長男長女は家に残るものと教えられた。そのため、家から通える仕事を選んだ。人口が保てたのは、「家」というものを中心に考えていたから。一方アンケート結果を見ると、今の中高生は、都会を知っているのに、それでも「暮らすのは小国」と答えているのだと思う。中高生が「遊ぶ場所」ではなく「にぎやかで活気のある町」を望んでいるのは、とても重要なことだと思う。

渡部委員

アンケートはどうしても聞き方によって結果が変わる。小国の人はまじめなので、良く答えてしまうところがある。そのため、これ自体についてコメントするのは控えたい。

「地域」の範囲をどう考えるべきなのかわからないが、自分としては、自分の地域である東部地区でやるべきことをやりたい。今年度は高齢者支援事業に取り組むこととしており、町にも協力してもらえらる予定なので、これを契機に地域づくりを進めたい。

関司委員

20年後、30年後を見据えたとき、どういう人がどのような形で小国に住んでいるとおもうか。または、住んでいてほしいか。

金野委員

「外から多くの人を訪れて、にぎやかな町」というのがキーワードとして出てきているが、自分がかつて住んでいた徳島の上勝町はまさにそうだった。ただ、外から来た人が必ずしも地元の人と仲良くなっていなかった。外からの人だけではダメで、移り住んだ人もその場に興味を持って自ら吸収してくれれば、その場の良さは残ると思う。外からの人が入り込めるような良い雰囲気大切だと思う。

舟山委員

子供が帰ってくるのが一番だが、本人が納得して帰ってこないといけない。自分も2、3年外に住んで小国の良さがわかった。帰ってきてほしいという働きかけは続けたい。

東部地区を見ると、色々な人を受け入れる土壌がある。小玉川ももっと受け入れればよいのにと感じたこともあった。

佐藤委員

ほど良く外の人に来るのが良い。結婚などで転入してくるのは歓迎。安部さんの話を聞いてはっとしたが、家というものがなくなると、伝統もなくなると思う。外から人が来て刺激を受けるのも重要だが、半数以上が地元というのが希望。

安部委員

生まれたところだからという理由でも、雪が好きだからでも、山が好きということでも良いので、「小国が好き」という人が住んでいる町になってほしい。

渡部委員

自分は媚なので、町に対する愛着という感覚はない。ただ、住んでいるからには楽しくし

たい。だから色々やっているし、子供たちも地区の行事に誘う。そうすると、なにか用事がない限り参加する。親が楽しんでいれば、良い地域に成るのではないか。

図司委員

住んでいる人の個性の束が町であり、ベースは家だと思う。子供たちとの向き合い方を考えたとき、家でやれること、地区でやれること、町でやれることなど、どのように考えるか。

金野委員

住んでいる人の半数以上が地元出身というのは、健全だと思う。仕事はなくても、起業という発想もある。小国ならライバルが少ないので、自分が何かしたいと思ったらやりやすい。また、若い人が一旦は外で働きたいと考えるのは、しっかりしたところで修行を積みたいということなのだと思うので、戻って来やすい環境を作るのも大切だろう。

舟山委員

中高生のアンケート結果を見ると、小国の良いところとして森林や河川などを挙げており、町の良さをしっかり理解していると思う。そういうところが好きな人に、選んで住んでもらいたい。雪の問題などもあるので、自分で納得して住まないといけない。

佐藤委員

学ぶところも働くところも自由に選べる時代なので、20代、30代の人々の意向が重要。世代間の交流を持ち、各世代の課題のベクトルをそろえた上で、「最低限これだけは」というものを出して、覚悟を決めて取り組む必要があると思う。

安部委員

自分は家を継げといわれたが、子供たちには自分の良いようにしろと言っている。そこで小国に残ってもらうためには、小国が好きになってもらう方法を考えることが大事。そのためには、住民自身で町を活気づけることが重要。外から人が来て活気が生まれるより、住民自身が楽しみ活気づく方が良いと思う。

渡部委員

金野さんが言った「ライバルが少ない」というのが一番印象に残った。私がもし以前のまま町中心部に住んでいたら、この場にはいなかった。そういうことを考えると、適正人数というものがあると思う。「小国町」を良くしたいということと「地域」を良くしたいというのは全然違う。「小国町」として何を指すかというメインの方針の議論がないと、小さい部会で色々な情報を集めても地域づくりは始まらないと思う。

図司委員

お話いただいたことは、根本は戻って来やすい環境や好きだと言ってもらえる方法に行き着くと思うし、そのベースとして何を指すのかということなのだと思う。

それでは、そのためにこういうことをやるべきというものを最大3つ挙げてほしい。

金野委員

仕事が確保できないといけない。環境的にここが好きという人は仕事を選ばないと思う。

起業については、ライバルは少ないが「出る杭は打たれる」ということがある。外からの人を受け入れるなら町としてのサポートが重要。

舟山委員

本当の課題は、町内に残りたかったのに出ざるを得なかった人たちや、緑のふるさと協力隊で来てそのまま定住した人たちに聞けばわかる。情報を収集すれば方向性も見えてくる。

また、地域づくりへの参加について「頼まれれば」という人が多いことについては、郡部では参加率が高い。中心部でももう少し参加率が高まり活気づけば町全体も盛り上がると思う。

出産については、産科開設は難しいと思うが、相談や医療連携などのサポート体制が大切。

あとは、自然や癒しなど、良いところをもっと PR すればよいと思う。

佐藤委員

1 点目は学校教育と起業の連携。小国町は小中高連携をやっているが、企業がどんな人材を必要としているかを教育の中で議論すべき。

2 点目はコミュニティ。地区や世代をまたぐコミュニティが少なくなっているが、そういう中に次の 20 年をどうするかという議論も出てくると思う。

3 点目は社会教育力。子供や若者に未来像を見つめさせる仕組みを作る必要がある。自分はここに住むのか、学校をどうするのかなど、自分で考えて意思決定できることが大事。

関司委員

世代の感覚は 5 年刻み位でかなり変わってきている。そういう意識で各世代と接し、それぞれの世代が持っている未来とは何なのかを話す必要があるということなのだと思う。

安部委員

会社に入った頃、町内で働いている人が総合センターで 3 泊か 5 泊かして、交流したことがあった。そういうものもあっても良いと思う。

また、小国町に残るには仕事的大事。給料をもらうだけでなく、いろいろな方法がある。そういう生き方もあるということを知ってもらうのが大事。

もうひとつは医療関係。産婦人科、小児科が 10 分~15 分くらいのところがないのは、子供を育てていく上で大きなデメリット。

渡部委員

子供が生まれないと人は減る。子供を産む環境を整備できれば一番良い。

また、町で災害が少ないことをアピールして人を呼ぶのはどうか。

3 つ目は、学校。学校のないところに人は来ない。地域のコミュニティの基本でもある。

関司委員

事務局、オブザーバーの方からもコメントを。

山口課長

町が目指している方向が見えないとの指摘があったが、これは情報をしっかり出していきたい。また、これまで 4 つの部会で色々な議論が出ているが、最後は魅力。それをどう引き

出すかが大切だと思う。

佐藤室長

アンケートではUターンを重視すべきという意見が多かった。そのためにできることを考えて施策を構築する必要がある。もうひとつは仕事作り。アンケートでは企業誘致というのが一番多かったが、一方で地場産業の活性化という意見も多かった。町としてもそういうことを目指してきたものであり、引き続き加速化させたい。出産子育てについては、各委員から指摘があったとおりで、全部できるものではないので、今やれることをやっていく。

廣瀬主任

仕事がないと暮らしていけない。ただ、他の部会で、仕事がないわけではなく「やりたい仕事がない」ということだという意見があった。小国町で東京のように多くの職種を求めるのは無理。そう考えると、まずは魅力づくりを重視し、それで小国が好きで戻ってきたときに仕事があるという状態をつくる必要があると思う。

渡部主任

集落の自治をもっと強固にできる仕組みを作ってはどうか。例えば地区振興協議会に自由に使えるお金を預けるなど。若い人が帰ってこないのは、地区の中で一定の役割が預けられないから。集落自治の中で役割があれば、責任感や愛着が生まれるはず。家庭の中で無理に「帰って来い」と言わなくても、地域がその役割を担ってくれると思う。

後藤課長

1 点目は職。小国の環境や生活文化を活かした研究施設を設置してはどうか。それを通じて高校と企業をつなぐ、あるいは外の人材を町内に呼び込むなど、波及効果が見込まれる。

2 点目は人と人とのつながり。中高生のアンケートでも小国の良いところとしてのパーセンテージが高い。これは、これまでに培ってきたものが継承されている証であり、小国の武器。それをベースにした安心できる暮らしというのを売りにしていくべき。

3 点目は豊かな自然環境の継承。これまで豊かな環境が保たれてきたのは、そこに生活して、自然との付き合い方がわかる人たちがいたから。人口減少の中で今までと同じようにはいかないとしても、外からの人も入れながら環境を維持していく必要がある。

伊藤所長

時代とともに、若い人が集まって何かをするということに魅力を感じなくなり、個々のやりたいことをやる時代になった。ただ、例えば地区のお祭りで若い人たちが実行委員会を作り、上の世代が手助けをするなどのコミュニケーションをとる中で、地域の課題を肌で感じていくことは可能。まずは地域の中で、一人暮らしの人がどうなっているか、除雪はどうかなど、隣組単位での声かけから課題が見えてくる。

お産については、町単独ではいくら検討しても実現しなかった。そのため、別な形でのフォローを行っているが、浸透していないのかもしれない。

仕事については、小国では仕事＝生きがいとなるのは難しい。仕事以外でも楽しみ、生き

生きと生きている姿を見せることによって、子供たちも魅力を感じると思う。

菅野主幹

ないものをねだっても仕方がない。あるものの中から自分の手で作り出すことで愛着が生まれる。また、他人がやったことには不満が多いが、自分でやったことならば満足できるし、満足できなくても積み重ねていくことで愛着が生まれると思う。

関司委員

これまでの議論で、肝になる部分が出てきたと思う。

1 点目は出産。町で対応できないものを、広域で対応する仕組みを作ることが重要。これは観光や防災も同様で、広域連携は地方創生のキーワードのひとつにもなっている。

2 点目は仕事。東京では誰のために仕事をするのかわからないが、小国ではリアルにわかる。育ててもらった恩返しをするという意味でも、帰ってくる選択肢が出てくる。そのためにも、学校教育の中で子供たちがそれを感じられる場を設けることが大事。

3 点目は地区の取組み。地区ベースでの取組みをしながらノウハウを共有し、それを横展開するような仕組みを、役場から仕掛けても良いのではないかと。

4 点目は若者のつながり。今でも緩やかに、しなやかにつながる場面はあると思う。今の時代に合う場の持ち方を探っていく必要がある。

第4回は全体でとのことなので、クロスオーバーする部分もあると思う。重要な部分をしっかり吸い上げて戦略を策定されたい。

また、戦略は作ってからが重要。懇話会や住民にフィードバックする場を大事にしてほしい。行政の中で結論を閉じず、どうやって実現するかを住民に示されたい。

○ **その他** 第4回部会を10月5日に4部会合同で行うこととした。